

者、法学者、法律家、スンニー派、シーア派、(ヒンドゥーの)バラモン、ジャイナ教徒、チャールバーカ、キリスト教、ユダヤ教、サービー、ゾロアスター教徒などが、この厳な集まりにおいて一堂に会して議論を行った¹⁹⁾。

と、いうことであった。

このアクバル帝の諸宗教の融和思想やその政策については、さまざまな批判もなされている。しかし、彼の融和思想が単なる思い付きや政治的なテクニックによって導き出されたものでないことは、幾つものエピソードによっても明らかとなる。例えば、アクバルは1567年シク教の第3代グルアマル・ダス(1479-1574)を訪問する。当時、結成間もない弱小教団であったシク教であるが、アクバルは彼に敬意を払い、彼に現在のアムリッサル一帯を与え、それがシク教団の躍進にも繋がった²⁰⁾。

このように、アクバルは身分の上下、宗教の如何を問わず道を求めるのに真摯であり、全ての宗教に寛容であり、また異なる思想に対しても謙虚に耳を傾ける思想家でもあった。

したがって彼は形骸化したイスラームの伝統も、また同じくヒンドゥー教の伝統も重視しなかった。特に、アクバルはヒンドゥー教徒の間にあった寡婦殉死(サティ)を禁止し、女性の立場を擁護した²¹⁾。

しかも彼は諸宗教の平和的共存を目指し、諸宗教の聖典などを翻訳する翻訳局をもうけ、『マハーバーラタ』などのヒンドゥーの古典のイスラーム系言語への翻訳、さらには『聖書』や『コーラン』などのインド系言語への翻訳を行った。

その伝統はムガル宮廷内に引き継がれ、曾孫のダーラーの思想活動に拠って一層深められた。彼の理念を表すものは、政治や宗教、思想領域ばかりでなく文化、特に建築領域において顕著である。その象徴的存在は、彼が十数年居住し、放棄したファテプル・シユクリの宮殿であり、また彼の墓所シカンダラーである。これらの建築物にはイスラームをはじめ、ヒンドゥー教、キリスト教、ジャイナ教など世界のあらゆる宗教文化が体系的に盛り込まれ、調和されている²²⁾。

X ダーラーの融合思想

さて、アクバルの思想を受け継ぎ、さらに発展させたのがひ孫のダーラー・シコーである。ダーラーの思想については、日本においては、アクバル帝のそれ以上に知られるところが少ない。しかし、彼の業績は偉大であり、比較文明学からの研究が本格的になされるべきである。

例えば、彼がサンスクリット語からペルシア語に翻訳させたウパニシャッド文献、これは『ウブネカット (Oupnekhat)』と呼ばれ、後にラテン語訳されてヨーロッパの知識人に大きな影響を与えたことは、よく知られたことである。これのみならず、ダーラーは、スーフィーとしてイスラームに固執せず、諸宗教思想に極めて柔軟に対応した。特に、彼はヒンドゥー教の諸聖典の翻訳事業などを通じて、神秘主義思想を極めた。特にヒンドゥー教の聖者バーバー・ラルの感化を受けてある意味でバクタとしての立場から、ヒンドゥー・イスラーム両教の融和を思想的に試みたのが、彼の代表作である『二つの海の交わる場所 (Majmā al-B'ahrayn)』である。

ダーラー自身が書いた本書の前文には、この経緯を、

(彼、ダーラーは) 真実の中の真実を覚り、スーフィーの真の宗旨(教えの根本)の素晴らしさに目覚め、偉大なる深遠なるスーフィーの英知を悟った後には、彼(ダーラー)はインドの(存在の)一元論者達(movahhedan)の教義を知ることを強く願った。彼(ダーラー)は学者達と交流し、インドの宗教における神の聖性について議論を繰り返した。彼等インドの学者は、宗教的な訓練と知性と洞察において最高に完成された境地に到達したもの達である。そして、彼(ダーラー)は、彼等(インドの宗教者)が捜し求め、獲得した真実について、言葉以外には、その違いを見出すことができなかった。その結果、2つの宗教(集団)の考えを集め、諸テーマを集め、真実を求める人に基本的で、有益な知識を供給する一冊子とし、これを名づけて『二つの海の交わる場所 (Majmā al-B'ahrayn)』とした²³⁾。

と、ダーラーは記述している。

この書物は、いわゆる「存在の一元性論」に立つスーフィー思想と同じく「一元的存在論」を展開するヴェーダンタ思想に共通性を見出し、これを基礎として、この世界が神の顕現であり、人間は神の本質のマイクロコスムである、というウパニシャッド的な世界観に強い共感を示すのである。そして、イスラーム教が政治的、社会的にも絶対優位を誇るムガル統治下であって、イスラームを相対化し、ヒンドゥー教をはじめとする多神教を、イスラームと同等な宗教として神学レベルから実践したダーラーの思想的な可能性は、イスラームと多神教徒との共存に道を開く思想の先駆となろう。そして、その背後にはインド的寛容思想があることを我々は知るであろう。

ダーラーの思想の特徴は、アクバル以来続くムガル宮廷内の伝統を踏まえつつも、自らイスラーム思想を極め、そのうえで伝統的なインド・スーフィー思想を受け継ぎ、イスラーム教の持つ諸宗教への寛容思想、融和思想の可能性を最大限引き出したことにある。

ただ、不幸にして彼は実弟アウラガジープ帝（1628-1658）との皇位継承戦争に敗れ刑死する。そして、彼の推し進めた融合思想、寛容政策は頓挫することとなる。しかし、その思想的な意義は、むしろ現在において生かされるべきであろう。

XI 非暴力という新しい道

インド独立の父マハトマ・ガンディーは、非殺生は、何者も敵としない強力な武器で、人間の最高善であるという信念のもとに、イギリスの植民地支配という過酷な状況から、非暴力、つまり血を流すことなく独立を勝ち取った、ことで有名である。

ガンディーは「非暴力は、『悪に対する真の闘争をすべて断念すること』ではない。それどころか、私が考える非暴力は、その本質が悪を増大させるに過ぎない報復ではなく、悪に対する、より積極的な真の闘争である。」と述べ、さらに「その動的な状況においては、自らすすんで苦しみを引き受けることを意味する。それは悪人の意志に対する服従ではなく、圧制者の意思に全身全霊をもって対抗することを意味する」²⁴⁾ という、極めて積極的且つ、崇高なものであった。そして、その背後には「私は、剣を捨てたので、私に反対する人には愛の杯しか与えられない。愛の杯を与えることによってこそ、彼らを近くに引き寄せようと想う。」²⁵⁾ という思想があり、その背後には「戦争の効力への進行と戦争に伴う恐るべき欺瞞とごまかしを放棄し、全ての人類と国家の自由と平等にもとづく真の平和を作り出す」²⁶⁾ という彼の願いがあった。

ガンディー思想の背景は、「形はさまざまであるが、生命力を与える精神は一つである。…全ての宗教の最終目標はこの根源的な統一性を理解することである。」²⁷⁾ というものであった。

マハトマ・ガンディーの思想が、20世紀の人類に与えた影響というより衝撃は、暴力（軍事力）が幅を利かす国際政治の真っ只中であって非暴力の力が、暴力を超え現実世界の問題に大きな影響力を与えうるということを実証したという意味で、人間精神の可能性の地平を広げたのである。これを中国の毛沢東の思想や行動と比較すると両者の違いにインド文明と中国文明の典型的な相違を見ることができであろう。毛沢東は、「鉄砲による平和」という様な言葉で象徴されるように、武力によって中国統一を成し遂げた偉人である。そのために、どれほどの人民の命が損なわれあるいは奪われたかは、余り問題にされなかったようである。

勿論、インドの寛容文明は、現実の政治体制においては、統一性の欠如ともいえるものであり、アショーカ王以降その版図に匹敵する領土を統一的におさめた王は、ムガル皇帝アクバルまで出なかったし、アクバル以降程無くインドは再び政治的には、実質的な分裂

状態に陥る。一方中国は、強力な軍事力に支えられた中央集権体制を維持し、幾多の統一王朝が栄えた。その意味では、政治的には中国の思想が、より優れているともいえる。しかし、政治的な多様性とは別に、インドにおいては文化的な統一性は保たれたことも事実である。

いずれにしても、インドの寛容文明を現代に復活させたマハトマ・ガンディーの思想は、アメリカの公民権運動の指導者キング牧師にも大きな影響を与えた、とされる。キング牧師は、アメリカにおいて絶対弱者であった（つまり現実問題としての奴隷）黒人の地位と権利の向上、というより創生のために、非暴力の戦術を採用した。そして、この南部の黒人解放運動の指導者に大きな精神的な影響と非暴力が暴力を超えるための戦略的な先例を示したのが、マハトマ・ガンディーであったことは、良く知られた事実である。マハトマ・ガンディーとキング牧師の行進の姿は、非暴力の可能性、良心が暴力に勝ることを象徴するものでもあった。

彼は志半ばで暗殺という悲運に見舞われるが、その精神つまりキング牧師の非暴力による闘争の背景には、「物理的力には魂の力をもって応えなければならない」という堅固な信念があったとされる。キング牧師は、荒れ狂う白人たちの暴力の嵐の中で、非暴力による運動を指導した。彼が公民権運動の文字通り先頭に立ち、多くの黒人たちを率いてデモ行進する姿は世界中に感動的でさえあった。彼は「闘いの本質は、白人に対する黒人の勝利ではなく、すべての人の自由と平等という民主主義の勝利の凱歌」を歌い上げることであり、それこそが白人と黒人がともに見るアメリカの夢である」と説き続け、黒人たちの先頭に立った。

ガンディーとキングの両氏は、まさに軍事力という暴力を背景に、弱肉強食の近代西洋文明が跋扈する世界において、人間良心の可能性、つまり暴力による支配・非支配の垂直構造とは全く異なる、水平的な共存システム構築の可能性を現代においてみごとに現実のものとしたのである。

つまり、マハトマ・ガンディーやキング牧師の行動は、近代文明の新たな可能性を開くものとして、文明の観点から大きな意義があったのである²⁸⁾。

しかしながら、21世紀を迎えた今日、今日の世界は彼等の時代から、前進したといえるであろうか？ 特に、9.11以降の「テロとの戦い」あるいは、「アラブの春」以降の混乱などを見ると、世界の情勢は、暴力の応酬と憎しみ増幅の連鎖がますます拡大しつつある、と言っても過言ではない悲惨な状況にある。

つまり、暴力が暴力を生み、憎しみが新たな憎しみを生む絶望のスパイラル状態である。このような状況を、如何に克服するか？ 我々一人一人真剣に考えるべきではないだろうか？ そのような時、マハトマ・ガンディーの非暴力、平和思想を生み出したインド

思想の「温かい寛容思想」に着目することは、決して無益ではない。特に、インドにおいて展開された多現的一元論思想に依る宗教間の共存の思想は、イスラーム教とキリスト教、あるいはヒンドゥー教とイスラーム教など、世界各地で頻発する宗教間の紛争に益するものがある、と筆者は考える。

XII ま と め

以上、インドの寛容思想に支えられた文明形態を概観してみた。このことから、インド文明が数千年間に亘り育んできた「非暴力」に支えられた「自他同置の寛容思想」の意義は、ますます大きくなっているということがいえよう。つまり、ヘブライズムや近代西洋文明が、切り捨ててきた多神教的発想、特に、その多神教原理に支えられたインド的な寛容の思想には、近代文明の対決の構図を根本から再構築する思想的可能性がある、ということである。

以上のように、近代文明的発想に呪縛された現在社会が直面する問題の解決に、インド文明のあり方は、大きな可能性を持つ、というのが筆者の考えである。

勿論、現在でもインドは階級差別、民族紛争、宗教紛争等々限りない紛争や問題を抱えている。しかし、そのような深刻な問題を抱える社会であっても、インドの歴史は、残忍な刑罰主義や軍事力による弾圧や強権支配という政治機構を採用しなかった、少なくとも、中心とはならなかった。

それがインド文明の核心であり、このインド文明の持つ寛容こそ、文明の暴力と憎悪のスパイラルが渦巻く現代文明への処方箋、少なくともそこから重要な教訓を得ることはできると筆者は考えている。

注

- 1) 詳しくは拙著『イスラム原理主義・テロリズムと日本の対応』北樹出版、2004年参照。
- 2) インド文明を貫く寛容の精神を明確化するために本小論では、その対極とも言える中国文明について、比較したいのであるが、紙幅の都合で本格的な比較は他の機会に譲り、本小論では簡単な比較にとどめた。
- 3) 詳しくは拙論「仏教における寛容の思想」小田川方子・欠端實編著『癒しの思想』麗澤大学出版会、2002年、60ページ以下参照。
- 4) 詳しくは拙論「ヒンドゥー・イスラーム融和思想とその現代的意義」『宗教研究』341号、2004年、157-179ページ。
- 5) 多神教を基礎としたギリシア思想が、一神教的原理のキリスト教圏でどのようにゆがめられているかについては、保坂幸博『日本の自然崇拜—西洋のアニミズム』新評論、2003年、76ページ以下などを参照。

- 6) J. Marshall "Moheno-Daro and The Indus Civilization" vol.1, Indorogical book house, Delhi, 1973, pp.70-95.
- 7) 中村元 (訳) 『ブッダのことば』 岩波文庫, 1984年, 129ページ.
- 8) 同 291 ページ.
- 9) 同 880 ページ.
- 10) 同 894 ページ.
- 11) 同 73 ページ.
- 12) 中村元 『宗教と社会倫理』 岩波書店, 1959年, 132 ページ.
- 13) 同 134 ページ.
- 14) 同 207 ページ以下参照.
- 15) 初山明 『始皇帝』 白帝社, 1994年, 99 ページ.
- 16) "Guru Gurant Sāhib" S.G.P.C., 1964, p.378.
- 17) 前掲拙論 「ヒンドゥー・イスラーム融和思想とその現代的意義」 参照.
- 18) Abul Fazal "Akbar Nāma" lucknow, 1284(H), p.252.
- 19) Ibid. p.253.
- 20) 拙著 『シク教の教えと文化』 平河出版社, 1992年参照.
- 21) 詳しくは, 謝秀麗 『花嫁を焼かないで』 明石書店, 1990年参照.
- 22) Satish Grover "Islamic Architecture in India" New Delhi, 1996, pp.127-151.
- 23) ゲーラーの研究は, 榊和良 「二つの海の交わる場所」 『東方学』 (第九八, 東方学会, 1998年) 106-120 ページ参照.
- 24) 竹内啓二ほか訳 『マハトマ・ガンディー 私にとっての宗教』 新評論, 1991年, 122 ページ.
- 25) 同 113 ページ.
- 26) 同 142 ページ.
- 27) 同 219 ページ.
- 28) 前掲拙著 『イスラーム原理主義・テロリズムと日本の対応』 第2章参照.

